様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月　３ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００９８７

研究課題名（和文）ニューカマー第二世代のライフコースに関するエスニシティ間比較研究

研究課題名（英文）Inter-ethnic Comparative Study on the Life Course of the Second Generation Immigrants in Japan

研究代表者
角替　弘規（Tsunogae, Hiroki）

静岡県立大学・食品栄養科学部・教授

研究者番号：１０２９８２９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本に在住する移民第2世代170名に対してインタビュー調査を実施し、かれらの日本社会における経験のうち、「編入様式」・「学校経験」・「文化適応」・「職業選択」・「将来展望」を明らかにすることを通じて、移民第二世代の現在のエスニックアイデンティティのあり方や学業達成及び地位達成のありようを理解することを目的とするものである。
　分析の結果、第二世代の日本社会への適応においては学校が排除の契機として機能する側面を持ちつつ、移民の親子が日本社会に適応するための資源を形成するうえで尚も重要な位置づけをもつことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1980年以降、日本に長期滞在する外国人が増えはじめてから約30年が経過した。当時来日した世代の子どもたちも青年期を迎え、かれらが第三世代を形成する時期を迎えている。こうした世代間の移行が見られる現在は、日本における移民第二世代の研究の好機である。
　先行研究では移民第二世代の文化変容はホスト社会の受け入れ文脈に強い影響を受けることが示唆されるが、日本社会の移民第二世代のライフコースを分析においても、第一世代の編入様式を考慮することが重要である。多様な背景を持つ人々との共生が模索される中、移民第二世代への正確な理解は、ホスト国としてかれらを迎え入れる準備を行う上で不可欠であると考える。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to understand the current state of ethnic identity, academic achievement, and status attainment of second-generation immigrants in Japan by interviewing 170 second-generation immigrants in Japan and clarifying their experiences in Japanese society, including "mode of incorporation," "school experience," "cultural adjustment," "career choice," and "future prospects.
　The analysis revealed that while schools functioned as an opportunity for exclusion in the second generation's adaptation to Japanese society, they also played an important role in the formation of resources for immigrant parents and their children to adapt to Japanese society.

研究分野：教育社会学

キーワード：ニューカマー　移民第二世代　移民と教育　文化変容　エスニシティ間比較　ライフコース　分節的同化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1980 年以降に日本に長期滞在する外国人（ニューカマー）の増加が見られるようになって、早くも 30 年以上が経過した。この間、親の移動に伴って来日を果たした外国人の子どもは、日本の学校教育のもとで育ち、すでに青年期から壮年期に差し掛かっている。加えて、日本生まれの外国にルーツを持つ子どもたちも青年期を迎えつつある。すなわち、ニューカマーは既に第二世代が第三世代を形成する時期を迎えているのである。

この間、ニューカマーの教育に関わる研究は、多くの研究が積み重ねられてきた。とりわけ、リーディングス「日本の教育と社会」における『エスニシティと教育』（志水宏吉編著 2009）の刊行に見られるように、教育学分野では重要な研究課題として認知されるに至っている。これに、本研究申請グループの分担者も大きく貢献している（志水・清水 2001、児島 2006、清水 2006、額賀 2013、三浦 2015）。しかしながら、こうした研究の多くは、「ニューカマーの子ども」を対象としながらも、そこに「第二世代」としての意味付けを十分に検討しないまま、学校文化の受容・学力・言語継承の問題を論じてきている。ただし、この点は致し方ない側面もある。なぜなら、ニューカマーの子どもたちを「第二世代」として位置付けるためには、親世代である第一世代からの社会経済的自立を一定の要件とするからである。

その意味において、ニューカマーの子どもたちが青年期から壮年期を迎える今は、ニューカマー第二世代の研究が可能になるまさにその時期と言えよう。

加えて考慮しなければならない点は、1980 年代以降のニューカマーの増加はエスニシティの多様化も伴って進行してきたという事実である。日本におけるニューカマーの来日の大きな波は、1970 年代後半のフィリピンやタイからの女性の風俗産業への従事に始まり、80 年代のインドシナ難民の受け入れ、続いて、中国残留孤児家族の帰国、さらに、90 年代の入管法の改定に伴う南米からの日系人の帰還と変遷し、このような来日の文脈の違いがニューカマーの日本社会への適応の違いを生み出していることは、よく知られているところである。

かつてアメリカにおける移民第二世代の文化変容を分析した Portes ら(2001)は、ホスト社会の移民の受け入れ文脈（編入様式）が、エスニシティごとに異なっていることにより、第二世代の文節的同化にも強く影響することを明らかにしている。この研究結果に基づけば、日本社会におけるニューカマー第二世代のライフコース形成を研究対象にする場合にも、第一世代の編入様式の影響を考慮する必要があり、必然的にエスニシティ間の比較が求められる。以上のような学術的背景より、本研究の研究課題の核心をなす「問い」は以下である。

①ニューカマー第一世代の編入様式が、第二世代の資源編成にいかなる影響を与えたか。

先行する５年間で蓄積されたインタビュー調査のデータは、Portes ら(2001)の調査に準じて設計したため、部分的に構造化された内容を含んでいる。それらのデータを量的データに変換し、「編入様式」・「学校経験」・「文化適応」・「職業選択」・「将来展望」の５つのテーマごとに、エスニシティ間比較分析を行う。

②第一世代の「家族の物語」は第二世代においていかに継承・転換されたのか。

先行する編入様式・学校経験・文化適応・職業選択・将来展望のエスニシティ間比較をベースに、第一世代の移動に際して編まれていた「家族の物語」が第二世代において、いかに継承・転換されてきたのかについて、エスニシティ間比較分析を行う。

③社会経済的変動は、第二世代のトランスナショナル実践に、どのように影響するのか。

本研究の主な対象者へのインタビューは、先行する科研費研究期間において既に終えているが、それらのインタビュー対象者に対してはフォローアップインタビュー調査を依頼済みである。このようなインタビュー対象者との関係構築により、昨今のグローバル経済の深化に伴う社会経済的変動が、第二世代にいかなる影響をもたらしているかが観察可能であると考える。分析視角はトランスナショナリズムであり、第二世代の国をまたがって行われる活動の社会経済的変動の影響に関するエスニシティ間比較分析を行う。

２．研究の目的

本研究の調査対象者は、約 15 年前の対象者への追跡調査であることが最大の特徴である。調査対象地区である神奈川県大和市は清水（2006）、愛知県名古屋市は児島（2006）での対象者の追跡である。また、他のエスニシティの調査対象者も本研究申請グループが５年前より先行する科研費研究期間において既にインタビュー調査を終えている対象者で、既にフォローアップインタビュー調査の内諾を取り付けている。こうした追跡調査により、第二世代のライフコースを理解するうえで、単なる一時的なインタビュー調査から切り取られるライフコースではなく、葛藤や読み替えなどダイナミックな姿が捉えられていると考えている。このような通時的な観点に基づく分析枠組みを用いる点に、本研究の学術的独創性を見出すことができる。

本研究の第二の特徴は、複数のエスニシティを横断した大規模調査研究である点である。このような調査によって得られるデータからは、編入様式、学校経験、文化適応、職業選択、将来展望等の多角的な観点を含んでおり、第一世代から第二世代を通じて将来を展望するライフコースにおけるエスニシティ横断的な主要な課題について、それぞれのエスニシティの特徴を描き

出そうとしている点である。単一のエスニシティを対象とした調査研究はこれまでも数多く行われているものの、統一された分析枠組みにおいて複数のエスニシティについての比較を試みている調査は報告されておらず、学術的価値は極めて高いと言える。

３．研究の方法

ニューカマー第二世代 170 名に対してインタビュー調査を実施した。エスニック・グループはインドシナ系（ベトナム系およびカンボジア系）、中国系、南米系（ブラジル及びペルー）、フィリピン系である。これらのグループは 1980 年代のニューカマー急増時に来日した数が比較的多いエスニック・グループである。各調査対象者は日本で微無教育経験があることを条件に、スノーボールサンプリング方式で調査依頼を行った。調査は半構造化インタビューにより実施した。インタビュー調査における質問項目は Portes と Rumbaut らが行った調査を参考に日本の文脈に照らして設定した。1 回のインタビューは 1 時間半から 3 時間程度で、基本的には通訳を介さず行われている。インタビューに際しては、人権の尊重及び保護、個人情報の保護を重視し、調査対象者にもそれらを十分に説明したうえで、許可を得て録音を行い、後日トランススクリプトを作成し、データとして使用した。また四点尺度で回答を求めた質問項目については数量的データに変換し、探索的な統計分析を行った。

４．研究成果

（1）ニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティの類型

ニューカマー第二世代 170 名のデータからエスニック・アイデンティティの類型を抽出するにあたって、「出身国文化の獲得程度とそれらへの帰属感」と「ホスト国文化の獲得程度とそれらへの帰属感」の二つを軸として設定し、そこからニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティを 4 つの類型に分類した。

一つは日本社会への同化傾向が強く「日本人化」するパターンを示す「ホスト国文化志向型」である。日本語を得意とするものが多く、また親の出身国の言語はほとんど身につけていない者が多かった。将来的にも日本での生活を念頭に置いている。またこの類型はメリトクラティックな学校文化を内面化したメリトクラシー型と、こうした価値観に不信感や抵抗を示す反学校文化型の二つの型が認められた。

二つ目は、出身国への愛着や帰属意識が強く、エスニシティによる自己定義を前面に打ち出し日本人化を否定する「出身国文化志向型」である。この類型に当てはまる者は親の出身国の言語に堪能で、その国に対する知識もあり、日本に滞在する同国人や出身国の家族や親族と強いつながりを維持していた。出身国での滞在経験も多く、滞在経験がない場合には出身国への「あこがれ」が強く示された。トランスナショナル実践も持続的に行われている。

三つめはホスト国と出身国のどちらにも愛着や帰属意識があり、どちらかへの文化に完全に同化することなく、両文化を織り交ぜたハイブリッドなアイデンティティを形成する「ハイブリッド志向型」である。この類型に当てはまる者は、日本語と出身国の言語の二つ（もしくはそれ以上）の言語に堪能な者が多く、言語のみならず二つの国の知識や文化的態度も一定程度身につけている。ここでは自らの将来について、二国間の社会・文化にまたがる自らのハイブリッド性を日本社会を中心とした場で生かしたいというローカル型と、出身国あるいはそれ以外の国において自らの可能性を試したいという構想を示すグローバル型という二つの型を見出すことができた。

最後は日本文化と出身国文化いずれにも帰属感を抱けず、いずれの言語も十分に獲得することができなかった状態にある「マージナル型」である。本研究において、実際に「マージナル型」に該当する者にアクセスできたのはきわめて限定的であったが、このような状況にある第二世代の若者は決して少なくないものと考えている。

（2）ニューカマー第二世代にとっての学校経験

本研究ではニューカマー第二世代に対する日本の学校の対応を検討してきた先行研究を踏まえて、ニューカマー第二世代にとっての学校がいかなる場としてとらえられていたか、について焦点を当てた。かれらが自らの学校経験を客観的に語ることができる年齢に達したということもこれらの分析を進めるうえでの大きな要因となった。特に学校での困難についてエスニック集団間比較を試みた。

かれらが学校生活における人間関係で困難を経験したものとして多く語られたのは、①自らのマイノリティ性を顕在化させる外見、言語、氏名といった客観的特徴、②文化や習慣の違いに根差す行動様式やコミュニケーションの仕方、③特定のエスニック集団に対して日本社会が全体として有するステレオタイプであった。

これらの三つを契機として、ニューカマー第二世代は他者化による疎外感や同化への巻き込まれによる疎外感を経験する。他者化による疎外感は外見上の特徴が引き金となっていじめが誘発されることが語られた。一方、肌の色などの外見上の特徴が目立たないエスニシティにあっては会見的な特徴を契機とした排除の経験を語る者は少なかった。また特定のエスニシティに対するステレオタイプも排除の契機として語られることが一部のエスニシティに特徴的なものとして見られた。

外見的特徴が日本人と大きく変わらない場合に出会っても、同化に巻き込まれることでの疎

外感を感じていた。とりわけ、出身国の文化において積極的な自己表現が肯定された者が周囲との協調性を重要視する日本の学校文化において大きな疎外感を感じていた。そしてそうした疎外感や違和感を感じつつ同化に巻き込まれた状態が継続するエスニシティもみられた。

こうした様々な困難の中で、ニューカマー第二世代はどのように対処していたのだろうか。かれらの対処のあり方について、困難を個人的に対処するか／集団で対処するか、利用しうるエスニック資源が多いか／少ないかという二つの軸から検討した。その結果、①エスニック資源に支えられた個人的対処、②エスニック資源に支えられた集団的対処、③エスニック資源の支えなき個人的対処、④エスニック資源の支えなき集団的対処の 4 つが見られた。エスニック資源に支えられた個人的対処は親世代や親族の階層やトランスナショナルなネットワークのあり方に大きく左右される可能性がある。エスニック資源に支えられた集団的対処はマジョリティとの没交渉に至る可能性を孕む。エスニック資源の支えなき個人的対処は、自らの異質性の抑制を強いられながらの同化が進む点で問題を抱える。エスニック資源の支えなき集団的対処ではマジョリティとマイノリティの関係性の再構築が可能となる可能性を秘める一方、反学校的仲間集団にあってはメリトクラティックな達成の機会を逸する可能性も考えられる。様々な課題を持ちながらも、多文化的仲間集団の形成と拡大が大きな課題と言える。

（3）ニューカマー第二世代のジェンダー

本研究では一部のエスニシティ（ベトナム、フィリピン、中国）について、ニューカマー第二世代のジェンダー意識についても検討した。アメリカの移民研究においては移民女性がジェンダー規範から解放されたという地検が示されるが、日本の場合は移住後もジェンダー規範から解放されにくいとされている。これは女性に対する職業選択の幅を狭め、不十分な子育て支援が女性の自己実現を阻害する日本社会の構造的な問題に起因すると考えることができ、移民女性のまた出身国のジェンダー規範から解放されることなく、それらに拘束されると考えられる。

この点について、とりわけジェンダー規範の継承に大きな影響が与えられると考えられる母娘関係に注目し、それらの違いからエスニック集団間の比較を試みた。その結果、ジェンダー規範継承については「世代間分断型」、「世代間持続型」、「世代間変容型」の三つが認められた。「世代間分断型」は母親のジェンダー規範が第二世代に継承されず分断したものである。分断によって衝突的な母娘関係である場合と疎遠な母娘関係である場合がみられた。「世代間持続型」は母から娘へとジェンダー規範が継承されるものであり、娘に対する母親の影響力が強く示されていた。「世代間変容型」は母親のジェンダー規範が娘に継承されつつも、出身国のジェンダー規範のうち、娘の負担となる規範については意識的に除外され、新たな母娘関係の構築がみられた。

（4）ニューカマー第二世代のトランスナショナリズム

またニューカマー第二世代のトランスナショナリズムについて、かれらのトランスナショナル実践が親世代のそれらとどのような違いが見られるのかといった点について、ベトナム、フィリピン、中国の 3 つのエスニシティについて比較検討した。

親世代のトランスナショナリズムはそれぞれの来日経緯や日本での生活のあり方からいくつかのバリエーションが認められた。フィリピン系および中国系では積極的なトランスナショナル実践が行われ、トランスナショナルな空間が形成されていた。

トランスナショナルな社会空間の世代間継承については「消失型」「維持型」「構築型」「拡張型」といったパターンが認められた。消失型では日本への定住を念頭とするもので出身国とのつながりが失われていく。維持型では出身国への情緒的なつながりとトランスナショナルな社会空間が維持されていた。構築型では親世代が出身国とのつながりを減じる中で第二世代が新たにつながりを構築するパターンであり、本研究ではベトナム系のみに認められた。拡張型は親世代が構築したつながりを第二世代がさらに第三国へと拡張させていくパターンである。

以上のようなトランスナショナルな社会空間の継承のあり方は第二世代が「トランスナショナルな家族」のもとで育っているかどうか、そして、家族の外部にあるエスニックコミュニティのつながりなどによって影響を受けるものと考えられた。

【引用文献】

児島明 2006『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒のｴｽﾆｼﾃｨ葛藤をめぐって―』明石書店。
三浦綾希子 2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ：第二世代のｴｽﾆｯｸｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ』勁草書房。
額賀美紗子 2013『越境する日本人家族と教育―「グローバル型の応力」育成の葛藤』勁草書房。
志水宏吉・清水睦美 2001『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって―』明石書店。
志水宏吉編著 2009『リーディングス日本の教育と社会 17 エスニシティと教育』日本図書センター
清水睦美 2006『ニューカマーの子どもたち―学校と家族の間の日常世界―』勁草書房。
Portes, A. & Rumbaut, R.G. 2001 Legacies : The Story of the Immigrant Second Generation. Univ. of California Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 額賀美紗子	４．巻 49
２．論文標題 外国人家族の《見えない》子育てニーズと資源仲介組織の役割ー外国人散在地域におけるフィールド調査からの政策提	５．発行年 2019年
３．雑誌名 異文化間研究	６．最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坪田光平・劉麗鳳	４．巻 36（3）
２．論文標題 中国系移民第二世代の配偶者選択に関する定量分析－出身階層とエスニック・アイデンティティに注目した予備的検討－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 技能科学研究	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坪田光平	４．巻 26
２．論文標題 中国系ニューカマー第二世代女性の学業達成過程－親子関係と文化継承に注目して－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日中社会学研究	６．最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坪田光平	４．巻 14
２．論文標題 中国系ニューカマー第二世代の親子関係とキャリア意識－トランスナショナルな社会空間に注目して－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国際教育評論	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 坪田光平・劉麗鳳
2．発表標題 配偶者選択の志向性における家族とアイデンティティの影響－日本の中国系移民第二世代を事例に－
3．学会等名 日本教育社会学会第71回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 清水睦美・児島明・角替弘規・坪田光平・額賀美紗子・三浦綾希子
2．発表標題 ニューカマー第二世代の適応の様相
3．学会等名 日本教育社会学会第70回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 坪田光平・劉麗鳳
2．発表標題 中国帰国者三世・四世の進路選択－家族の多様化とエスニシティの影響－
3．学会等名 日中社会学会第30回大会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

1．著者名 清水　睦美、児島　明、角替　弘規、額賀　美紗子、三浦　綾希子、坪田　光平	4．発行年 2021年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 704
3．書名 日本社会の移民第二世代	

１．著者名 額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子　編著	４．発行年 2019年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 264
３．書名 移民から教育を考える：子どもたちをとりまくグローバル時代の課題	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	清水　睦美 (Shimizu Mutsumi) (70349827)	日本女子大学・人間社会学部・教授 (32670)	
研究分担者	児島　明 (Kojima Akira) (90366956)	同志社大学・社会学部・教授 (34310)	
研究分担者	額賀　美紗子 (Nukaga Misako) (60586361)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	三浦　綾希子 (Miura Akiko) (90720615)	中京大学・教養教育研究院・准教授 (33908)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	坪田　光平 (Tsubota Kouhei)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関